

297  
3  
204

014698-000-8

特16-536

世之始

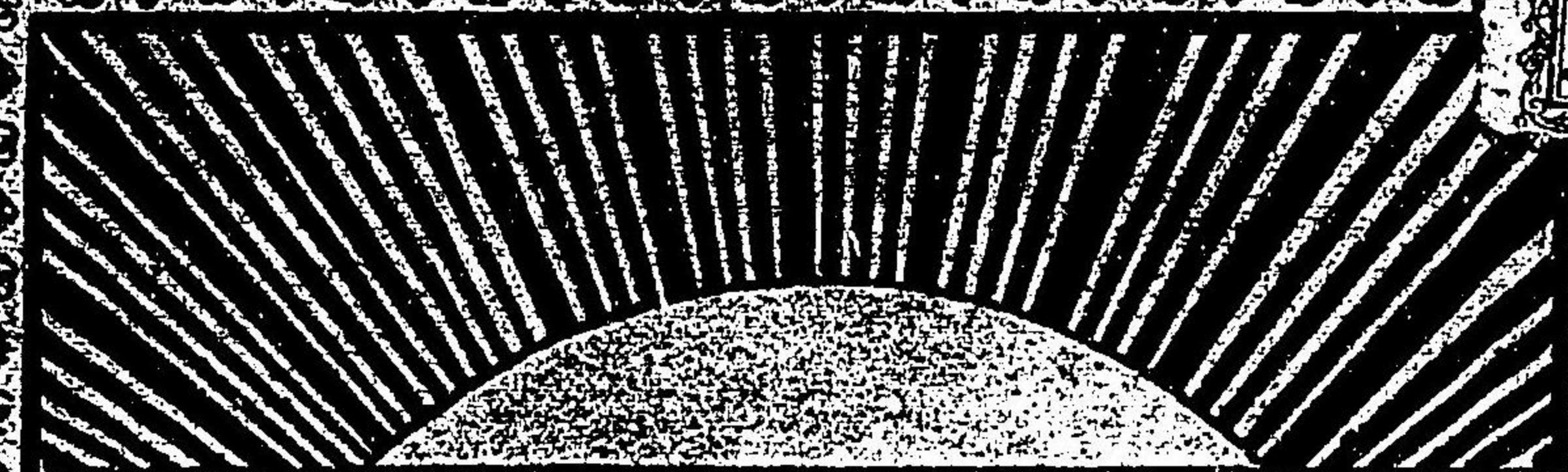
大本 利三郎/著

M22

ABB-1139



世  
之  
始  
全





No 16928/22



世の始

第一章

目録

世の始の事

第二章

天地月星の事

第三章

淤能基呂島を造り并男女交合の始

第四章

根れ國高天の原の事

第五章

伊邪那美伊邪那岐の命根の國へ往賜ひし事

第六章



かきかき



須佐の男の命五十猛の命新羅の國へ天降り賜ふ事

第七章

世界に上下の有事

第八章

伊邪那岐の命根の國へ往賜て世に惡の殘る事

第九章

天照大御神の事

第十章

大國主の神少名比古名の神此國を造り固め賜ひ少名比古名の神は外國へ渡り賜ふ事

第十一章

天使豐葦原の水穗の國の出雲に天降り賜ふ事

第十二章

天津日高日子穗能邇々藝の命水穗の國の日向み天降り賜ふ事

第十三章

天津日高日子穗能邇々藝の命木花之佐久夜毘賣み娶て御子神を生賜ふ事

第十四章

人魂歸天の事



世之始

第一章

世の始の事

天地の初發の時天津御虚空に成坐せる神の御名は天の御中主の神高皇産の神神皇  
 産の神此三柱の神は皆獨り神なりまして御身を隠し賜ひき此天の御中主の神は神  
 々の靈と天地萬物の原の氣を集め司どり賜へり高皇産神の男神お坐し神皇産神の  
 女神に坐して天乃御中主の神の御神勅を畏み賜ひて神々の靈と天地萬物の原の氣  
 を分散し自由自在に成し賜ふ故天地萬物を造り賜へり神の始に天地月星を造り賜へ  
 る時黑暗の大虚空に初て一ツの物を造り賜へり其體ち言難し浮雲の如く海月那洲  
 漂蕩る時其中より葦牙の如く萌騰る物によりて成坐せる神の御名は宇麻志葦牙比  
 古遲乃神此時天地月星の原虚空に散別る、次に天の底立神

此五柱の神は別天神次也



國の底立神次に豐樹澤神次お宇比地邇神妹須比地邇神次に角機神妹活機神次又大斗能地神妹大斗能辨神次に淤母陀琉神妹吾屋惶根神次に伊邪那岐神妹伊邪那美神此妹と有は兄妹の事にあらず男女の義なり

宇麻志葦牙比古遲の神の始て光り萌騰と凝し賜へる神なり世に明りの始なり次に天の底立神の天底立即ち大陽の中に立賜ひて天に屬する空中の物を其中お引んと惠賜へる神なり次お國の底立の神は國の底立即ち大地の中お立賜ひて地上の萬物を其中お引んと惠み賜へる神なり次お豐樹澤の神は大地中の左右お立賜ひて常に地上の萬物を其有所に保んせん事を惠み賜ひ次お宇比地邇の神須比地邇神は地即ち土を惠み賜へる神なり次お角機神は天地の萬物化して體となる芽を惠み賜へる神なり次お大斗能邇地の神大斗能辨神は天地の萬物皆女夫となるのる、事を惠み賜へる神なり斯神々の御惠より猶分け御靈の御功德により大虚空

に有る天地月星皆動ひて斯なりぬ

第二章

天地月星の事

大虚空に初て成れる一つ乃物葦芽の如く萌騰り是が天地月星と分れ此天と云は即ち大陽地と云は即ち地球月と云は即ち月の世界星と云は即ち星の世界あり彼の一つの物の中より葦芽の如く大虚空に萌騰り分れて天と化り地と化り月と化り星と化り今此地球上より見放る大陽をさして天と云ふあり大虚空をさして天と云は只其惣名おえて實は此大陽をさして天と云ふあり故に大虚空と天とは大いに異ればなり又地即ち地球此の地球お成べき物は太陽と分れて猶大地になるべき総ての物の内凡土砂と潮と水と分れず圓さ形ちのみにして今世お云ふ土呂菟とを云べく未だ固まらず大虚空お懸り浮雲の如く浮脂の如くして漂よひしなり彼の二川の物大虚空にて一度散分れてよりなを互に分れて三川に分る有二つに分る有四川五つに



分る、物有てかくなりぬ

第三章

淤能基呂島を造り並男女交合の始

是ふ天津神諸々命もちて伊邪那岐伊邪那美二柱の神に詔賜わく此漂蕩へる國を造り固めなせと天瓊矛をたまひ此時伊邪那岐伊邪那美二柱の神此大詔を畏たまひて天の浮橋にた、して彼の土呂粥とも云べき末だ固まらざりて青海原ふ其瓊矛を指下を凝々ふかきなまて引揚賜むし時其矛の先に垂落るもの自から凝つもりて島と化る是を淤能基呂島と云ふ此島に伊邪那岐伊邪那美二柱の神天降まきて天の御柱を見立入尋殿を見立賜ひ是より美斗能麻具波むせんと詔たまひて男女交合の道を始賜へり又此淤能基呂島は豊葦原の水穂の國淡路の西北の隅に在る胞島是なり又豊葦原とい即ち地球をさきて云ふ水穂の國とい即ち日本の國をさして云ふ皆神の名付賜む又二柱の神國を生んと言契らきて即ち汝しは天の御柱を右より廻りわ

へ吾は左りより廻りわぬんと詔賜ひ時伊邪那美神あなやま愛男をど詔賜ひ後お伊邪那岐神あなやま愛少女をど詔賜ひ久美度に起きて御子を賜ひ次に淡島を生此は女に言先達て御子を賜ふ故ふさわす此御子悪くして御子の數にり入らず是より天に昇りまきて天津神に請賜ひて更に天の御柱往廻り先に伊邪那岐神あなやま愛少女をど後に妹伊邪那美神あなやま愛夫をど詔竟御合まきて淡路の徳の狭別の島次に伊豫の二名の島それより島々國々即ち日本全國を生み是より次第に外國々既に全地球の國を生竟さて諸て物の成れるは小より大に至る物にきて陸地と海水と分れたる所更に神を生んと詔賜ひて神々を生又大綿津見の神を生み賜ひ此の海の神速秋津日子の神速秋津比賣の神此は潮の八百會に坐す神志那都比古の神此は風の神久々能智の神此は木の神大山津見の神此は山の神鹿屋野比賣の神此は野の神天の鳥船の神此は後に顯幽分界の時出雲の國へ副使立賜ふ神なり大宜津比賣の神此は衣食の原の神火の迦具土の神此は火の神金山比古の神金山毘



賣の神此は金の神埴夜須比古の神埴夜須比賣の神此は土の神彌都波能賣の神此は水の神和久産巢日の神此神の御子豊宇氣比賣の神と申す即ち伊勢の外宮に坐々して諸て世の中の食物の事を恵み賜ふ斯く神々の御功德より猶多くの神々の持分け賜へる御恵みによりてかくなりぬ

第四章

根の國高天の原の事

天津神天地を造り賜へる時天と地とは分れて天は大虚空お止地球と月との未分れをてして月の地球の下方おほりて太陽の光りを受ざる故根の國底の國或の夜見の國又黄泉國とを云ひ此國は地球より分離するの國に去て地球と共に大虚空お懸り未動き廻らず大虚空お懸り漂蕩太陽お對へる時は晝をさし太陽お昏ける時は夜をさし又晝をなして恰も大洋お舟の浮めるが如く漂蕩となり然れど何方へも漂蕩旋り行て只其所の定まらぬと思はるなれ共そは天津神の始に太陽と地球と分け賜ひて

大陽の大虚空に止め又地球も月と共に大陽の周圍お漂蕩廻りて恰も親の其子を守るに同じそれより月は地球と分れて如此見放る月世界となりて此地球より分れたる世界にして彼の世界も國土がありて多くの禍の神々成居りき只其月界の悪く穢き事の此世界より聊か異なれ共此世界の分國なり又高天の原即ち大陽彼の大陽にも國土が有て天津神々を始奉り神集々て諸々神々の集り賜へる世界お去て即ち天國なり此天國おは天の岩戸或は天の安の河原或は天の香山或は五百箇石村など、廣大なる所有り是を解バ大州に分ち又小州に分ち國お分ち郡に分ち大山に分ち大河に分ち村に分ちが如く又天國は其外表方に火の丸く寄集て大いある火の玉と見ゆるも實は此大地よりもなを大いなる天國に數萬の穴有て其數萬の穴よりは絶間かく空中お火を吹出し其火の大いなる天國の外方の遠方を廻り包める故大いなる火の玉と見へ又火の盛んに寄集て有なれば天國は一時に焼失んと思はるなれ共其の大いなる天國に其火の未届かざる前に宇中間の總て萬物お照り徹りて天國の其



焼失んとするの愁なま實に神所業の人力の測り知る所にあらず又天國は此世界より總ての物美ふえて實に此世界乃本國おして其大小も大いお異ればなり又幾億万と限りもなき星の如きも大小の別ち有りて一世界をなま實に造化乃神々の御謀賜ふ御功德は甚も奇妙なる事と知るべし

第五章

伊邪那美の命伊邪那岐の命根れ國へ往賜ひま事

愛ふ伊邪那美の命は火の神を生み賜へるおよりて石隠ります時伊邪那岐の命に告り賜ひく夜は七夜晝は七日吾を見賜ひぞ勿とまをま賜ひむしを其七日七夜にたらずして其隠り坐す事いと奇哉とて見そあわす時火の神を生賜ひて御保登焼れて病臥し坐々其悶熱懊惱時吐りに成り坐せる即ち其御口より吹出ま賜ひし神の御名は金山毘古乃神次お吹出し賜ひし神は金山毘賣の神此は金の神あり又伊邪那美の命夜は七夜晝は七日吾を見賜ひぞ勿とまをま賜ひむしを其伊邪那岐の命いに見賜

むしを誠に照賜ひて根の國へ神避を賜ひま時黄泉平坂迄往賜ひ此黄泉平坂は此世界より月界に神々の往還りし賜ひし時の道として此世界より往き賜ひし道は出雲の國の伊賦夜坂是なり又黄泉平坂の黄泉國即ち月界に有て互に此界より彼の界に往き還り仕賜ひし道口と知るべま此黄泉平坂より引還し御子神を生んと言賜ひて即ち埴夜須毘古の神埴夜須毘賣の神を生賜ひ此の土の神なり次お彌都波能賣の神を生賜ひ此は水の神なり斯く引還し土の神に水の神を生賜ひし何故となれば此世お火の神を生置て若ま此火の神の荒び賜まかば國土お火の禍事のれこらん事を思欲して彼の土水の神を生賜ひ故に火を防ぐには土水を以て防ぐ事になりぬ是より伊邪那美の命根の國へ神避り坐まて還り坐さねば伊邪那岐の命其妹伊邪那美の命を相見まく思はして黄泉國に追往坐ま其時伊邪那美の命殿戸より出向ひます時伊邪那岐の命語らひ曰く愛まき吾汝妹の命吾と汝と造りし國未だ造り竟ず有ば還り坐さんと語賜ひま愛に伊邪那美の命まをし曰く悔しき哉速來坐まて吾は



黄泉戸喰之つと此黄泉の國の汚れ火の物を喰ひ賜ひて御身の汚れ賜へば還り坐之  
 がたく思はせぬれ共愛しき吾夫神の入來坐す事恐ければ還りなんとあまたおの  
 ばらかに黄泉神とわけつらぬん今まばし愛に待賜ひて吾を見賜ひど勿とまを之賜  
 ひて其殿の内即ち御殿お還り入坐す程甚久しくて伊邪那岐命待兼賜ひて一つ火燭  
 えて入り見ませる時蛆たかれとろ、きて八種の禍の神々成居さ是に伊邪那岐命見  
 畏まみて逃還りなす時族ら離れんと語り賜ひ爰に伊邪那美の命其殿の内お還り入  
 坐て黄泉戸喰し賜ひし事を夫神是を見賜ひしを伊邪那美の命まことに耻賜ひし御  
 心より即ち黄泉醜女を遣ひして追まめ又八種の禍神をまて千五百のよも川軍を起  
 して追まめき此黄泉國に軍神の有て即ち日界此世界月界星界夫々一世界を爲之殊  
 に此星界又の大小の差ありて大なる物は一世界を爲神界人界無人界恰此世界に  
 有諸島の如く彼界には山泉河海虫魚草木等有て此世界お異なる事なし又伊邪那美の  
 命は猶千五百の軍起して御自ら追來坐す時伊邪那岐の命即ち千引の石を取らま

て平坂お投うて賜ひて其石を中おすへ置相對へ立たして許登度をわたす此時伊邪  
 那美の命愛くしき吾汝せの命如此爲賜は汝の國の人草を一日に千頭くびり殺さ  
 んどまをし賜ひき爰お伊邪那岐の命愛くまき吾汝もの命汝しが如此爲賜は吾は  
 一日お千五百の産家を立んと詔り賜ひ此御言によりて世の中の死する人より生る  
 、人多き事は何萬歳の末お至り如此御詔の違はざるは誠に信すべき事なり又伊邪  
 那岐命其黄泉國より逃還り坐とき其國の甚も穢き國なりと日向の國お還り坐して  
 橘の小戸の櫛が原お御祓を任賜ひ彼穢き繁國乃汚お因て成り坐せる神乃御名は八  
 十禍津日の神次お大禍津日の神又總て禍事を直さんと仕賜ひて成り坐せる神は神  
 直毘の神次に大直毘の神次お神々成り坐して又左の御目を洗ひ賜ひし時に成り坐  
 せる神の御名は天照大御神又右御目を洗賜し時お成り坐せる神の御名は月夜見の  
 命又御鼻を洗賜ひし時成り坐せる神乃御名の建速須佐の男れ命此時伊邪那岐の命  
 大歡喜して吾は御子生々て生の終りに貴の御子を得る即ち高皇產神神皇產神おま



をま<sup>あげたま</sup>上賜ひて其御身に掛させ賜ふ御頸玉の玉の緒を母由良<sup>もゆら</sup>取由良<sup>とりゆら</sup>迦<sup>あまてら</sup>て天照大御神に與賜ひて詔賜く汝命は高天の原をまらせと言依さし賜ひ即ち其御功德の天地間に漚満治め賜ふ所の大權を與へ賜ひ此時天照大御神は此大詔を畏み賜ひて天に昇り坐して高天の原即ち日界を知し召て日の若宮に鎮り賜ひ須佐の男の命汝は青海原の國即ち此地球を知らせと言依さし賜へ共須佐の男の命は御母の坐す根の國に罷らん事を思欲します故天照大御神の所に罷りあんと申て即ち天を騰ります時其御所業の烈しければ國土皆震ひ悉く動さ此時天照大御神聞驚かして待賜へうばわんと思ふといかにと詔賜へば吾のきたなき心あしと申上賜へば天照大御神然ば汝の心清明事といかにして知んと詔賜へば須佐の男の命然ば劔玉の誓して御子生んとまをし上賜ひしに付即ち天照大御神先づ建連須佐の男の命の持せる十拳の劔を乞賜ひて三段お打折り奴那登母由良に天の眞名井に振濊ぎ佐加見に加美

て吹乘る氣吹の狹霧お成坐せる此天の眞名井は即ち日界第一の上水此水おて三つに打折賜へる御劔を勇み賜ひて天の眞名井に振濊ぎ佐加見に加美て吹乘る氣吹即ち三つに打折賜へる御劔を御口おかみ賜ひて其御口より空中に吹出ま賜ふ氣は狹霧となり其狹霧の中に成坐せる神の御名の多紀理毘賣の命次に市寸島毘賣の命次に多岐都毘賣の命又天照大御神の八尺の句瓊の五百津の美須麻流の珠を奴那登母由良に天の眞名井に振濊ぎ佐迦美に迦美て吹乘る氣吹の狹霧に成り坐せる神の御名の正勝吾勝勝連日天の忍穗耳の命次に吹乘る氣吹の狹霧に成り坐せる神の御名は天の善男能命次に吹乘る氣吹の狹霧に成り坐せる神の御名は天津日子根命次に乘吹る氣吹の狹霧に成り坐せる神の御名は活津日子根命次に吹乘る氣吹の狹霧お成り坐せる神の御名は熊野久須毘の命前三柱の女神の須佐の男の命の物質に因て成り坐せる故須佐の男の命の御子あり後五柱の神は天照大御神の物質に因て成り坐せる故即ち天照大御神の御子なりと如此詔別賜ひ此御子神の成り坐せるも男



女交合の道より成り坐せる有らずして、**劍玉の誓**即ち**玉と劍**との物質の御所業によりて、**神々成り坐せ賜ふ**。此時**伊邪那岐命**此御子々の成坐てより、**後ち神直毘の神**と共にお高天の原に鎮まり賜ひて、**天津神**を始奉り、**天照大御神**の幸わひ賜ふ事及び總て世の中の善なる事を議り賜ふが故に、**高天の原**に鎮り賜へるなり。

第六章

須佐の男の命**五十猛**の命**新羅**の國に**天降賜ふ事**

是に須佐男命は**高天の原**にて、**大宜都毘賣**の神に食物を乞賜ひし時、其**大宜都毘賣**の神種々の味の物を取出して、**須佐の男**の命に進め奉る時、命の穢き物を奉るとて、怒り賜ひ、**十拳の劍**を拔て、其**大宜都毘賣**の神を切て殺せ賜ひ、其殺され賜へる御身に生れる物は、**御頭に蠶**生れり、**御體より生る物**は、**稻種**生れり、**麥種**生れり、**粟種**生れり、**大豆種**生れり、**小豆種**生れり、**諸の物の種**物生れり。此時**天照大御神**是を見歡喜て、詔り曰はく、**此物は、顯見青人草**即ち**人類の食**て活べき物なりと、詔賜ひ。此時**高皇產神**、**神皇產神**

此諸の種を取らしめて、**天の狹田**及**長田**に植さしめ賜ひて、其種を神々お渡さしめ賜ひ、又**天照大御神**御自から、其**御營田**に御植させ賜ひし、**稻**は一年ごとに**天津御祖**の神に貢進り賜ふも、**深き御心の有事**と知るべし。又**須佐の男**の命は、**高天の原**より**天降り**坐す時、其御子**五十猛**の神も共にお降りまして、**諸々草木穀物の種**を多く持賜ひて、**新羅の國**にお降りまして、是より**五十猛**の神は、**筑紫**にお渡りまして、日向の國より、**始て普く諸々の種**を播植賜ひて、いに**日本の國**青き**野山**となり、是より次第に**外國々**にお渡り、**播植賜ひて**、既に**全世界**青き**野山**となりぬ。又**青人草**即ち**人類の外諸々の生る物**の、其持分け賜へる神々の是を造り賜ひ、**海魚**は**海神**、**水魚**は**水神**、**土に生る物**は**土の神山**に生る物は、**山の神**是を造り、**皆神々の持分け**、**天津神**に請ひ賜ひて、其所の地に從ひて造り賜ひ、又**須佐の男**の神は、**此新羅の國**より**出雲の國**の**肥**の河上にお有、**鳥髪**の地に至り、まえて見坐せる時、**國津神**、**大山津見**の神の御子、**足名槌**乃**神手名槌**の神女、**男坐**々々此御女、**櫛名田毘賣**とまをす、**女神**坐々て、**おれ**女神の**漱**は、**八股**の**大蛇**とて、**此女神**の



仇なれば迎十拳の劔を抜賜ひて八谷を渡る八頭を苦もなく斬りはふり賜ひ斬りて  
 得賜ふ襲雲の劔は代々に傳りぬ又其八股の大蛇とて實は多々見彦の神と申す惡神  
 おして其八谷に渡る八頭と見へまも此惡神乃姿を變て大蛇と顯又天襲雲の劔を彼  
 の大蛇が持てるも實は天照大御神の天の岩屋戸に隠り賜ひし時誤つて天より遺失  
 賜むしかば彼の多々見彦の神是を拾らひ取りて其劔を隠し出すまじ迎身を大蛇と  
 顯れて荒ぶるあり又天襲雲の劔は須佐の男の命の五代乃孫天智根の神此御劔を天  
 照大御神に返し上奉り賜ひ故に今も人類社界に於ても其遺失物は其主に返すとい  
 ふの誠おさも有べき事あり是より須佐の男の命は櫛名田毘賣と諸共お宮造るべき  
 所を求めんと須賀の地に至り坐えて此地吾心清々しと詔賜ひて其所に須賀の宮を  
 造り賜ひし時御歌に（八雲たの出雲八重垣妻籠に八重垣造る其八重垣を）と詠え  
 賜ひまは是和歌のはじめなり其櫛名田毘賣を久美處に起して御子を生賜ひ又須佐  
 の男の命は御母の坐す根の國お入坐さん事を思欲しつれども青海原の國を知せと

伊邪那岐の命の御依さしを畏み賜ひて潮の八百重の至る限り見そなわして國々を  
 造り固め賜ひ此青海原潮の八百重の至る限りとは即ち全世界残らずと云ふ詔りと  
 知るべし又須佐の男の命は其御子孫の次々に五世の程出雲の國に坐まえて其御子  
 神の國々を造り固め賜ひし事を見賜ひて六世の末胤大國主の神生坐て遂に御思欲  
 の如く御母の坐す根の國へ鎮り賜ひ禍津日の神も命お屬坐して根の國へ鎮り賜  
 ひ此根の國の惡しき神々の荒ふるなれば人類お其禍を誘ひて大いなる惡の起るお  
 れば其惡き神々を守て其禍を防がん爲又人類の此世お於て惡をなし若し其國の法  
 律おまぬかる、と雖も死して其靈魂必ず夜見即ち根の國へ行て永く誠賜ふも皆此  
 國土を守り賜ふが故お根の國へ鎮り賜へる事と知るべし

第七章

世界に上下の有事  
 世界の玉の如くして自廻りなば何方を上とも下とも横とも云ふべきおめらさと思



ふは只一通りの事に之て實は此地球に必ず上下の有事と知るべし其の天津神始に  
 天地月星を造り賜へる時天と地と分れて未だ固らず廻らず大空に懸りて漂蕩る時  
 伊邪那岐伊邪那美二柱の神天の浮橋に立たえて瓊矛を持て凝々又かきなして引揚  
 げ賜ひし時其矛の先お垂る物即ち於能基呂島と化る此於能基呂島の化れる處は大  
 陽の方に向ふ故即ち上おまて日本國の地は其上に位して天津神の始に造り賜へ  
 る故世界の本國と云ひ如此上の有なれば必下も有り又横も有り始も有り終も有り  
 又月は此世界より分れて互に廻りてかくなりぬ又諸の物上下と云ふ事は高き所を  
 上と云ひ低き所を下といふ是只一通りの事おして又上と云ひ上と云ふ始は天津  
 神の居賜ひし日界の方をささて上と云ひ又上と云ふなり故お天津神々の居賜ひし  
 處即ち上おまて空々茫茫たる廣大無邊ある大空にの上を無く又下も無く横も無く  
 實ハ此日界即ち大陽の方をささて上と云ひ又天と云ふ是よ外お上下と云ふ語の  
 出る事なし又此大地球は月と分れて互に廻り始る後は何方を上とも又下とも云ふ

べきにあらす只廻りて大陽の方お向ひたる方を上と云ふべし又此本國を甚小さ  
 く造り賜へるは何故なればと思ふ人の有なれば其の諸物の大なる物にのみ美あ  
 る物なく數丈の大盤石も壹寸の玉に之かずとか國も又如何ほど廣く大きなる逆惡  
 き國の惡く又小さなり逆美國の美國如此天津神の御量り造り賜へるによりてなり  
 と知るべし又文字などは神代の文字杯も有なれば其は只後世お至り人類の爲に設  
 け賜へる物おして實は神々の御上にては文字杯は無用の物にして神は千萬歳の後  
 の事をも能く辨へ賜ひ是の後世人類社界の事務の多く成るに隨ひ其事務を扱ひ又  
 其事務を忘るゝが故お人類の言語を助けん爲便利を以て設けたる物なれば文字は  
 人類の必要なる物と雖も只其言語を助くるの物おして即ち神有て人類有人類有  
 て言語あり言語有て文字有故お神の始に造り賜へる本國は言の國に之て即ち言  
 魂の幸ふ國といふ故お我音韻の自由自在の働さど外國々の音韻とを能く聞分けて  
 本津御國と云事を哲べし



伊邪那岐命根の國へ往賜ひて世に惡乃殘る事

是ふ伊邪那岐命根の國へ往賜ひし時根の國あ八種の惡き神々の成居るは何故に此惡き神を天津神は成居去賜へるとなれば素より善あれば必惡ありて此惡をかれば又善の分らぬば天津神の御心として此惡き神をも成居らし賜るなり故に人類を始め天地間あ有萬物皆此善惡の無物は奇々然れど萬物の靈長たる人類の此善惡を見分け惡を捨て善を爲すは元より天津神の御教にまて惡の只其善を知らぬんが爲の惡なれ共世の人類は多く其惡お引さる、故此惡を防がん爲法律を設け或は軍兵を置て其國を守るも皆此惡の有故なり又伊邪那岐の命根の國より還り賜ひし時惡しき神々の其御跡を追ひ此國土來りて千萬歳の神代より今お其惡の此世お残りて其惡しき神々の誘ふなれば必人類の惡起りて惡は惡を引又其惡に引さる、人の多くあるは天に神の居賜し事を忘れ只身軀の自由お働くのみを知りて其本を知らざ

る故なり神有ばこそ天地有天地あればこそ人類の有人類あればこそ神の教有又天津神は其善惡を見分賜て善をなせば永く惠賜ひ惡をなせば是を誡め賜ふは即ち神理の然らしむる所なり又伊邪那岐命其惡き禍を直さんと思欲賜ふ故神直日の神の成坐して伊邪那岐命に属し坐て高天の原に鎮り賜ひて其惡き禍を直さんと惠賜へるふより人類は此神々の御惠をも常に守るべし

第九章

天照大御神の事

天照大御神の御身の光明彩しく天地に照徹りまして靈異に妙なり賜ふ故御依えれ隨々高天の原を知え召して普く御照ます故始お伊邪那岐の命乃天照大御神と御名を負させ賜ひ又天照大御神は高天の原を知し召てより常に天津御祖の神に仕へ奉らん事を思欲坐して御自から蠶の道を開き賜ひ忌服家に臨ませ賜ひて天の衣織女に神衣を織らしめ又天の御營田お御自ら臨ませ賜ひて稻を植させ賜ひ植産種藝の



事業を起し賜ひ又其御營田の稻は一年毎に取らせ賜ひて八百萬乃神を集へ集へて  
 天津御祖の神に奉らん迎祭典の式を行はせ賜ひ又天孫降臨の時此祭典式を授け賜  
 ひて水穗の國即ち日本國に傳る事とありぬ又天照大御神の御神靈は今伊勢の國  
 又鎮り賜ふ

第十章

大國主の神少名比古名の神此國を造り固め賜ひ  
 少名比古名の神は外國を渡り賜ふ事  
 大國主の神少名比古名の神天津神の詔の事を畏み相並てこの國を造り固め賜ひ  
 後少名比古名の神外國々を造り固め渡り坐して其れより多くの神々を生賜ひ  
 又伊邪那岐伊邪那美の神の此大地を造り固め賜ひしより須佐の男の命の御子五十  
 猛の神次に妹大屋津比賣の神次を抓津比賣の神坐まして此大屋津比賣の神に抓津  
 比賣の神二柱の神諸々草木穀物の種を全世界の國々へ持往あまねく播種賜ひ又少

名比古名の神は御祖神産巢日の神の手股より久岐斯御子坐まして誠に甚も奇志  
 く尊とく其御功德に至りても殊お秀で賜ひて外國々を普く旋り往賜ひて國々を造  
 り固めまた多くの神々を生み賜ひ又此末胤の神々の植させ賜ふ故世の中の人々は  
 多く此神の御末胤おして少名比古名の神の此國より彼の國に渡り賜ひて其末胤の  
 あまねく増殖へ賜ひて如此ありぬ故お世の中の人類其御末胤を有なれば其御末  
 胤の人々は本つ御祖の神々を尋ぬる事と知るべし

第十一章

天使豊葦原の水穗の國の出雲お天降り賜ふ事  
 是に高天の原に於て天照大御神の詔勅を以ちて豊葦原の水穗の國は吾子正勝吾勝  
 々速日天の忍穂耳の命の知らさん國と詔勅を發せ賜ひて高皇産の神天照大  
 御神又思ひ金の神に思はえめて即ち天の安の河の河原の議場に臨ませ賜ひて八百  
 萬の神を召し集め賜ひ又思ひ金の神の八百萬の神の議主となりて議りお議り賜ひ



玄處豐葦原の水穂の國は天照大御神の詔勅のまゝく天忍穗耳の命の知え召事となり是に天忍穗耳の命天の浮橋に立して見坐せる時此豐葦原の水穂の國は國津神等甚くさやぎて有けりと還り昇らして申上賜むしかば即ち高皇産の神天照大御神思金の神に思はまめて又天の安の河原の議場も各も臨ませ賜ひて八百萬の神を召して議り議り賜ひし處天菩卑の神を勅使とまて遣はすべしと即ち天菩卑の命豐葦原の水穂の國を知らせる大國主の神の所に降し賜ひし處此天菩卑の神は大國主の神おこびへつらいて還り賜わづ是によりて高皇産の神天照大御神又諸々の神お議り賜ひて天津國玉の神の子天若日子此神を遣すべしと即ち天若日子大國主の神の所に降りし所大國主の神乃御女下照比賣坐まして此比賣を妻とまて還り昇り賜はず是によりて天若日子は遂に天の返し矢に中りて身うせ賜ひき故に又天の安の河原お於て天照大御神詔勅を以て思ひ金の神又諸々の神お議り賜ひし所此度の建御雷ちの神に天の鳥船の神を副へて遣すべしとて即ち此二神は水穂の國の出雲

の伊那佐の小濱お天降り坐して十拳の劔を抜き浪の穂お逆立て大國主の神お向ひ詔賜はく高皇産の神天照大御神の詔勅を以て使ひせり汝ぢのうしはける葦原の水穂の國は天照大御神の御子知し召さん國と言依さし賜へり汝ぢの心いかおぞと問ひ賜ふ時大國主の神吾子八重事代主の神又建御名方の神是に仰せと語り賜へば即ち八重事代主の神建御名方の神に此事を問ひ賜ひき處即ち天津神の詔勅のまゝく此國は天津神の御子お奉つらんと申賜ひき爰を以て又大國主神に問ひ賜ひし所吾子二神共仰の隨々吾も違はじと申上賜へば即ち建御雷の神天の鳥船の神天に還り昇り坐えて此事を申上賜ひしかば又天の安の河原の議場も各も臨ませ賜ひて天の忍穗耳の命お此事を仰せ賜へば天忍穗耳の命詔賜はく天津神の詔勅のまゝく水穂の國お天降らんと思欲ひれども天照大御神の御許に長く仕へ奉らん事を思欲坐して是を只管に詫び賜ひき故爰を以て天忍穗耳の命の御子に坐まえて天邊岐志國邊岐志天津日高日子穗の邇々蘇の命に仰せて天降し専ら國を治め賜わん



事ことお議はかり賜たまひ爰こゝを以もつて更さら又また高たか皇みむす産うぶの神かみの詔しう勅ちよくを以もつて經かつ津ゆ主しの神かみお建たひ雷みかづちの神かみを副まへて大おほ國くに主にぬしの神かみの所ところお遣つかへしして詔のり賜たまはく汝あんぢが知しる顯あらは露はの事ことの今いまより天あま照てる大おほ御み神かみの御み孫まごの命みことの知しる又また汝あんぢは八十やそ垵まて手てに隠かくりて幽かみ事ことをしる又また汝あんぢが住まべし所以ところの天あま照てる大おほ御み神かみの詔しう勅ちよくを以もつて天あま日ひ隅ぐみの宮みや即すなはち今いま出い雲いづも乃も國くにの大たい社しゃ底そこ津つ石い根ねお宮みや柱しら太ふとまく高たかく作つくりてむと又また天あま菩あめ鼻はなの命みことを以もつて汝あんぢの前まへを拜いつさ祭まつらしめと詔のり賜たまひ故ゆへに大おほ國くに主にぬしの神かみの幽ゆう界かいに鎮しづまり賜たまひて神かみ事ことを司つかさどり賜たまひ顯げん世せの國くにを治さめ賜たまふ事ことは天津あまつ日ひ高たか日子ひこ穗ほの邇に々に藝ぎの命みことの此この大たい權けんを司つかさどり賜たまへる事こととはなりぬ爰こゝを以もつて顯ま幽ゆう分ぶん界かいと云いふ

第十二章

天津あまつ日ひ高たか日子ひこ穗ほ能に邇に々に藝ぎの命みこと水みづ穗ほの國くにの日向ひうお天あま降くだり賜たまふ事こと

是こゝお高たか天あまの原はらの天あめの安やすの河かの河かわ原はらの議ぎ場やうに八や百ひゃく萬まんの神かみを召め集あつめ各おのも各おのも其その議ぎ席せきに臨のぞみ賜たまひし時とき天あま照てる大おほ御み神かみ此この豐あは原はらの水みづ穗ほの國くには吾われ孫まご天津あまつ日ひ高たか日子ひこ穗ほ能に邇に々に藝ぎの命みこと

汝あんぢの知しる國くになりと詔しう勅ちよくを發はつし賜たまひ又また天津あまつ日ひ高たか日子ひこ天あめ地ちと共に常とこ盤はに堅か盤はお榮さかへま  
 さむと又また八や尺じやくの勾かぎ玉たま又また劔けん思し金かねの神かみ手て力ちから男おとこの神かみ天あめの石い門もん別わかの神かみを副まへ詔のり賜たまひ曰この此この鏡かみ  
 は專まら吾われ御み靈たまとして吾われ前まへを拜いつくが如ごとく拜いつ奉まつり賜たまへ又また思し金かね乃な神かみは御み前まへの事ことを取とり持もちて  
 政まつ事じを取とらしめよと詔のり賜たまひ又また八や尺じやくの勾かぎ玉たまに此この劔けんは天あめの下したれさやぎを鎮しづ賜たまへ又また天あま照てる  
 大おほ御み神かみ吾われ聞きし食めす齋い庭にわの穗ほも吾われ子こ孫そんに聞きし食めしむべまとい即すなはち御み營えい田だの稻い穂ほに諸もろ々ろ  
 の物ものを副まへ賜たまひ爰こゝに天あめ兒こ屋や根ねの命みこと布ふ玉たまの命みこと天あめの受う賣めの命みこと伊い斯し許こ理り度ど賣めの命みこと玉たま祖その  
 命みこと合あはせて五ご柱しらともなひ賜たまひ即すなはち君きみとならせ臣しん下くだとなり賜たまひ是これによりて君くん臣しんの道みち明あきら  
 かに別わか賜たまひ既すでに天あま降くだり賜たまひし時とき是こゝに國くに津つ神かみ名なは媛ひめ田た毘び古この神かみ御み先せん導どうとして天あめの八や衢ま  
 より御み前まへに立た賜たまひ多おほくの神かみ々ろを臣しん下くだと仕した賜たまひて天津あまつ日ひ高たか日子ひこ穗ほ能に邇に々に藝ぎの命みことの  
 後のち左ひだり右みぎを供ともなひ賜たまひて天あめの石い位くら離はなれ即すなはち日ひ界かい坂さかはなれ天あめの八や重かさね棚たな雲ぐもを押おし分わけて筑つ  
 紫むらの日向ひう乃な高たか千ち穗ほの久く士し布ふ流りゅう嶺りやうお天あま降くだり賜たまひ爰こゝに等ひたし沙さの御み崎さきお甚いた善さき所ところぞと其その地ち  
 に底そこ津つ石い根ねに宮みや柱しら布ふ斗たう斯し理り高たか天あめの原はらお氷こ木き多た迦た斯し理りて即すなはち御み殿でんを造つくり三さん種しゆの神かみ器き



を拜奉り賜ひて八百萬の神を召集め神議り議り賜ひ又はより専ら水穂の國を造り  
 固め賜ひ又八百萬の神の内にて命の御依しを畏み賜ひて外國々を造り固めに渡り  
 賜ひ總て國を造り固めと云事は伊邪那岐の命の國々を牛竟陸地海水と分れ山野の  
 形ち而己おして禽獸草木も無く又人類の住むべき事の出さざる程の事あれば是を  
 神々の開墾賜ひ之事を是を國造り固めと云然れを適々靈の命の天降り賜ひし頃は  
 山河の差別も能く分り禽獸草木諸の物有て人類の住む事も自由に出來譬へば人類  
 が諸の物を作るも初に人の造りたる事を見て後に人の物を作るに同じ全世界も  
 又一時お神の造り固め賜ふにあらす古き千万歳の神代より順次に國々を造り固め  
 賜ひて後世に至り人類社界の今日とはなりぬ故に國を造り固めと有時は能々心を  
 付考べし又世界お人類の多くあるも天津日高日子德能靈々靈の命の天降り賜ひ  
 頃よりあまねく増殖賜ひ又命に屬坐して天降り賜ひし神々の御子等ち御依しを  
 畏み賜ひて外國々へ渡り賜ひ又少名比古名の神の御末胤の神々爰かまこと居賜ひ

まも頼がて其御末胤の増殖賜ひて或は北へ或は南へ或は西へと皆其善き處の地を  
 撰み居賜ひて其國より彼の國へ彼の國よりは此國へと互ひに分れ賜ひ譬へん諸  
 々種播に其種の初の程は爰かまこと其芽の出るなれ共頼がて數万の苗となり又種  
 となり其種の或は西へ或は南へと頼がて全世界お繁茂する事となりぬ故に地上  
 の人類は皆神々の御末胤おして君臣となり夫婦となり父子となり兄弟となり朋友  
 となる物にして萬物の靈長爲る事更に疑ふ可きにあらず又天津神は地上の萬物を  
 徒らお造り興へ賜へる物に非ず皆人類の爲に造り興へ賜ひる物なれば地上に有諸  
 ての物は皆人類是を支配して其總ての物に益有事を見出すは尤天津神に對て奉り  
 て人類の勉むべき道おして譬は農業を爲すおも心の及ふ限り又力の及ふ限り是を  
 耕しすれば天津神の御心に叶ひ又其人力の及ばざる所お至りては何れの助を求ん  
 どするか智者學者有位者によつて其晴雨の助を求んとするか決て能はざる所なり  
 然れば其人力の助及ばざる所お至りては即ち天津神々の助を願わんより外に道な



かるべし人類が爲す所の工業其他百般も其人力の及ぶ限り又心の及ぶ限り勉め又  
其及ばざる所に至りては必ず神の助ふ依頼し又植産業杯は天津神の助ふ依て大い  
ふ利を得る物ふして爰に諸々種を播に始め天津神此種を人類に與へ賜へる物なれ  
ば疎かに播にわらずと心に天津神乃御惠の程を能辨へて其種を播なれば必ず天津  
神々の恵み賜ふふよりて其植物の能生育して遂に世に大いなる益を得る事といな  
りぬ

第十三章

天津日高日子穗能邇々藝の命木花之佐久夜毘賣に娶て御子神を生賜ふ事

爰に天津日高日子穗能邇々藝の命は筑紫の日向の高千穂の久士布流精に天降賜ひ  
てより笠沙の御崎にて専ら天の下を治め賜ふ事を司どり賜ひし時爰に國津神御名  
の大山津見の神の御女め御名は木の花の佐久夜毘賣と申奉る女め神坐々々此女神  
を乞娶坐きて御胤を妊み賜ひて時木の花の佐久夜毘賣ををし賜へく天津神の御子

を私に産まじるべきにあらす今こそ御子産べき時になりぬと申上賜ひしかば邇々  
藝の命は其一夜に妊めるの甚怪しと申賜ひしかば木の花の佐久夜毘賣の命は八尋  
殿を造り賜ひ其殿の内ふ入らせ賜ひて既に御子産んと仕賜ふ時天津神の御子なら  
ばとて其八尋殿に火をつけ火の盛んに焼昇る時其火の中ひて生れ賜ひ即ち神わざ  
と知るべし其御子あるを以て火照の命とま燧す次に生賜ひし御子は火須勢理の命  
次に生賜ひて御子は火遠理の命又の御名は天津日高日子穗々手見の命三柱坐々々  
此御兄火照の命は海佐知毘古として鱈の廣物鱈の狭物を取り賜ふと有て即ち海の  
大魚小魚諸の魚を取海産物の事を始め賜ひ又火遠理の命は山佐知毘古と有て即ち  
山野の諸の獸を取陸地の産物の事を始め賜ひし所又後に是を換させ賜ひて火照の  
命は山佐知比古と火遠理の命即ち穗々手見の命は海佐知毘古と各々其佐知を換さ  
せ賜ひてそれより天津日高日子穗々手見の命は海神大渡津見の神の所に往賜ひ三  
年せ其國に居賜ひて大渡津見の神の御女の御名は豊玉毘賣と娶坐して御胤を妊み



賜ひし後のち穗々ほほ手見てみの命みことは此本津國このもとつくにの事ことを思欲おもほして還かへらせ賜ひし時御ときみ兄山佐知あにやまさじひこ毘古ひこの命みことは御そのみ其弟海佐知そのまらみ毘古ひこの命みことの諸もろの爲賜ためふ御功徳ごこうとくに感かんじ賜たまむて御み兄火照あはほりの命みことの申まを賜たまめ今いまより以後いんご吾あまも吾子孫ごそんも八十やそ續つひき汝みまが命みことの守護人まもりびととなりて仕奉つかへまつらんと申賜まをひて即すなはち穗々ほほ手見てみの命みことを屬ぞくし賜たまひて天あめの下したを治さめ賜たまふ事に御心ごんこころを副そへさせ賜たまふ故天ゆへあま津日高つひたか日子穗々ひこほほ手見てみの命みことは三種さんしゆの神器しんぎを受うけさせ賜たまひて専もつぱら天あめの下したを治さめ賜たまふ大權たいけんを司つかさどり賜たまふ故ゆへに今いまに至いたる國くにふ二君にくん坐まさす事ことと知しべし又豊玉毘賣またよたまひめの命みことは彼かの國くにより此國このくにへ入來いりきたらせ賜たまひてまを乞賜たまはく吾あは天津神あまつかみの御胤みたまねを妊はらみしに今いま其御子ごみこ産うべき時ときありぬ迎むかへ即すなはち鶴つるの羽は茸草はかやふして産殿うぶやを造つくらせ其産殿そのうぶやの家根末茸草やねいまだかきあ合あへぬに御腹みはらたへ堪たがたくからせ賜たまへば其産殿そのうぶや入坐いりまして御子ごみこ生賜うめんと仕賜し賜たまふ時其夫神穗々手ときそのをひまほほて見みの命みことにまを乞賜たまめ曰たまく總もて子こを生うむは國くにの形かたちおなりて子こを生故うむゆへに吾あも今國いまくにの形かたちになりて御子ごみこを生故うむゆへれ吾あを見賜たまひど勿なと申賜まをひて産殿うぶや入坐いせ賜たまひしを夫神其御言をのみそのごことばの甚怪いとあやしとて遂つひに産殿うぶや入いらせ見賜みひしかば其御形そのみかたち常つねに變かれせ賜たまひしかば是これを見

畏かしこみて逃退にげしりぞき賜たまひ此時豊玉毘賣このときよたまひめの命みこと夫神ごみの是これを見賜みひま事ことを甚いと耻はづかしと思欲おもほして即すなはち生賜うめひし御子ごみこを此國このくにへ置おかせ賜たまひて海坂うらさかを塞ふさぎ遂つひに彼乃國かへ返かへり賜たまひま愛こを以もつて生うみ坐まる御子ごみこの御名ごみは天津日高あまつひたか日子波限建なみのりたけ鶴茸草つるがきあ合あへ不ふの命みこととまをしける又豊玉毘賣またよたまひめの命みことは海坂うらさかを塞ふさぎ返かへり賜たまひてより其御子そのごみこを産賜うめ時夫神是ときそのをみこれを見賜みひしを常つねに其御心そのごんこころを恨うらみ賜たまひつ々も其御子そのごみこを此國このくにへ生うみ置賜おひし事を戀こひに堪たへ賜たまはづて其御子そのごみこの事ことを思おもひ賜たまひし縁ゆかりによりて玉依毘賣たまよりひめの命みことの彼國かのくにより此國このくにへ入來いりきた坐まる時玉依毘賣ときたまよりひめの命みことに附賜つひて御歌ごんうたを献たままひり賜たまひける其御歌そのごんうたに(赤玉あかたまの緒いとさへ光ひかれと白玉しろたまの君きみがよそひし貴たかとくゆりけと)と又其夫神またそのをむみのこたへ賜たまへる御歌ごんうたよ(おさつ鳥鳴とりかことく鳥しまに吾われい寢ねし妹いもわすれし世よのまどぐぐ)詠あいし賜たまひまも古ふるき昔むかしの神代かみよより君きみは臣しんを惠賜めぐみたまひ臣しんの君きみを貴たつと親おやは子こを思おもひ子は親おやを思おもひ夫は妻をとを思おもひ妻は夫をとを思おもひ兄あにの弟まごを思おもひ姉あねは妹いもを思おもひ皆愛みなあいひたつて愛あいひし此愛親このあ親あみより乞こて如此御かくおん歌うた詠あいし賜たまへる物ものなれば神代かみよも今いまも異ことなりし又此天津日高またこのあまつひたか日子波限建なみのりたけ鶴茸草つるがきあ合あ



へ不の命は玉依毘賣の命に御娶坐て生ませる御子の御名は五瀬の命次お稻水の命  
 次お御毛沼の命次お若御毛沼の命又の御名は豊御毛沼の命又の御名は神倭伊波禮  
 毘古の命とま媛す合せて四柱坐々々其御毛沼の命は常世の國即ち外國に渡らせ賜  
 ひて外國々を開墾賜ひ又稻水の命は御母玉依毘賣の故卿へ入坐き五瀬の命は國津  
 神の御末胤登美能那賀須泥毘古が痛矢串を負して崩さり賜ひ又神倭伊波禮毘古の  
 命即ち神武帝は三種の神器媛受させ日向媛發し賜ひて後ち倭の國の畝火の白檮原  
 の宮に坐々て天の下を鎮め賜ふ大權を祖宗に受させ賜ふ故へ天神地祇を拜々専ら  
 政事を司どり賜ひ又鶴草菅合へ不の命の御末胤の甚長くして此時の頃より神  
 々の御末胤の彌増殖賜ふ故又其御功德を天津神お還し賜ひて空中を自由に往還り  
 仕賜ふ事能はず其御位もなく自ら人類となり賜ひ然れど神々の皆人類と而已なら  
 せ賜へるにはあらず神は顯幽を兼賜へる物なれば幽に鎮り賜へる神々も有事と知  
 べし又此御末胤の自ら人類と成賜ふ事は恰も有位の人の其位を還して無位の人と

成に同じ又人類は此世に生れ神々の御末胤なれば總て物の原を知るは人類の尤勉  
 べき道にきて先人類は此世に何故お生れ來る物成かど疑を起し又天地星月の活動  
 成資と事を知りて天に神の居賜ひし事を知は人類第一の道にして此道の能く分る  
 なれば神の愛君の愛親の愛兄弟の愛朋友の愛遂お全世界の朋友乃愛を求るに至る

第十四章

人魂歸天の事

人の靈魂は天の御中主の神の司どり賜ひ高皇産の神神皇産神此天の御中主大神の  
 御靈徳を受させ賜ひて靈魂を人類に授け賜ひて人此世に生れ又死れば其靈魂は天  
 津神の御許に腹歸して生死共天神の御恵に頼らざるはなし故お人は此世に於て惡  
 を捨善を爲せば天津神々の御心に叶ひ必ず天神幸福媛授け賜ひて富家となり或は  
 高位高官に昇り又智識を世界に輝お至る然れども此世に於て惡を爲し若々國の法  
 律を免る、とも死れば其靈魂は必黄泉即ち月の世界に往て永く其罪を誠め賜ふも



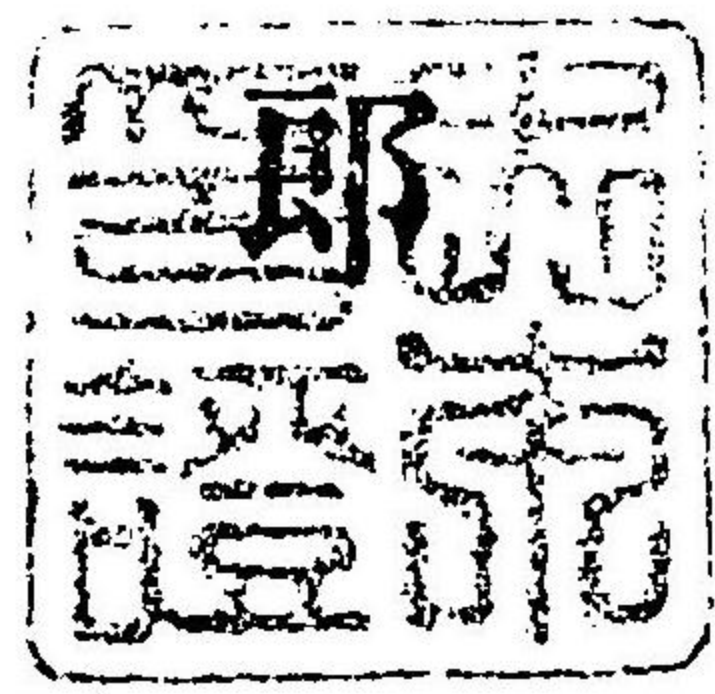
顯世の惡の必ず幽世に至る物なれば謹むべし又此世の中の多くの人類が惡き事而已爲し又神に不敬を爲えて人の道を忘る、時は世界皆暗と成る其は高天の原に於て天照大御神須佐の男の命劔玉誓の勝進およりて須佐の男の命の惡き禍事而已爲し賜故天照大御神見畏堪賜はづて天の石屋戸お刺隠り賜ひし時高天の原も全世界も皆暗と成る此時八百萬の神驚かし賜ひて天の安の河原に神集々て高皇産神思金の神お思はしめて神議り議り賜ひて種々の美き物を取集め奉進て天照大御神の御心お叶ひ奉らんと種々に御心を慰め賜ひし時天照大御神天の石屋戸より出坐賜ひしおより再び高天の原も全世界も皆照り明るく成しとは實お天地間の生とし生る者の幸とは云べし嗚呼天神の御惠疎かにすべからむ



明治二十二年五月八日御届  
 明治二十二年五月五日印刷  
 (定價金拾五錢)

著述兼發行人 士族 大本利三

廣島縣備後國深津郡福山町 字神島町中市三番邸



印刷人 平民 幾野芳助

大阪府西區江戸堀南通三丁目 七十二番屋敷

發行所 大本支店



→ F-A